と思想

時流に反して

竹山道雄

文藝春秋

時流に反して

定価　九〇〇円

昭和四十三年十月十五日　第一刷

著者　竹山道雄

発行者　上林吾郎

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話（代）二六五―一二一一
郵便番号一〇二　振替東京七八七四三

印刷所　凸版印刷
製本所　中島製本

＊万一落丁・乱丁の際はお取替いたします

© 1968　Michio Takeyama　Printed in Japan

目次

1
縦の木と薔薇 9
蓮池のほとりにて 27
磯 32
2
若い世代 43
空地 49
昭和十九年の一高 56
3
学生事件の見聞と感想 71

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

門を入らない人々 89
4
ベルリンにて 117
モスコーの地図 179
5
白磁の杯 193
6
焼跡の審問官 287
妄想とその犠牲 305
聖書とカス室 389

7
昭和の精神史
あとがき 433
編注 521
初稿発表覚え書
主要発表一覧
著訳書一覧

時流に反して

1

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

樅の木と薔薇

——運命について——

一

T・K兄、高原からの御手紙ありがとう。東京へ帰られることは中々むずかしいでしょう。またそう急がなくてもいいのではありませんか。御手紙にあるように、薊を食べたり、浅間山の裾を星がだんだん消えてゆく暁に牛乳をつんだ荷車にのせてもらって町にゆくような月日も、うらやましく思われます。その間にロマン・ローラン全集のような大きな仕事がすすんでゆくことを祈ります。

私は焼跡の街を通ってつとめに行きます。なにもかも煩わしく困難です。まさにこういうのが敗れた国の世のありさまなのでしょう。日常生活という怪物がわれわれの精神をすっかり呑みこんでしまいます。ただあわただしく、その日その日を追われて過しています。

それでも一頃よりは落着きました。ときにはいささかの暇をえて、ひとり静かに坐っていることもあります。ずいぶん久しぶりのことです。そうして、いまさらのように貧しくなった自分の部屋の中を見まわします。

こういうときには、私の心の中には、前には知らなかったサンサシオンが湧きます。これは昼間はたらいているときには忘れているが、夜になると頭をもたげてきます。これは心の底に追いこまれて、そこに固定観念となって、いま私の考えること感ずることのすべての上に翳を投げるのです。

十年のおそろしい体験の後で、人生はあたらしい展望をもって浮び上ってきました。戦争の体験は、私にとってはただ戦争の体験ではありませんでした。それは人生の体験でした。生きているということが、これを契機として、そのかくれていたさまざまの相を露呈したのです。

いま、この展望を、そうしてその中に生きている私の心の情況を、記してみようと思います。

といっても、簡単に記すために何かきっかけが必要です。大兄は「ようやく人間の威厳が恢復される時がきた」と書かれましたが、この言葉はちょうど私の考えていたところにうったえるので、この手紙もこのことに即して書くこと

とします。

二

十年間の体験は私にふしぎな知覚をあたえました。前には感じたこともないさまざまのものを感ずるようになりました。その例を二つ三つあげてみます。

映画は高速度撮影やまたはその反対の技術その他によって、肉眼では見られない実在を示してくれます。たとえば、スクリーンの上では、卵がおたまじゃくしになりそれから蛙になる経過が、三分間で見られます。

ところで、私は以前は国が亡びるのは百年もかかって次第に衰弱してゆくのだと思っていましたが、ヨーロッパで国が次々と仆され、わが国も四囲に敵をつくったころには、国が亡びるのは三年で十分だということを知りました。そして、そのありさまを、さながらスクリーンにうつしだしたように目撃しました。

また、スクリーンでは、普通にはとても知覚できない変化をとらえて、これを拡大して、その推移を目の前にありありと示してくれます。あるとき、皮膚の組織が剝落し増殖して変ってゆくさまを見たことがありました。ところが、私は近頃のこの社会にいかにある種の人々が漸次に落伍し、没落し、淘汰されて、表面から消えてゆくかのさまをまざまざと見、また他の型の人々があたらしく興って社会の皮殻をつくってゆくのをまのあたりに眺めています。

また、私は環境に対する自分の知覚がいかなるものであるかをも、はじめて知覚しました。そして、それが敏感とも無感覚ともいえる奇妙なものであるのにおどろきました。人間は一方には、きわめて敏感に、そのときそのときの環境に反応してそのいかなることをも摂取します。すべてをかくあるのが当然なのだろう、とうけとります。他のすべての人間が同じような条件をうけいれつつあるとき、ただひとりが他とちがった感覚をもちつづけているのは、むずかしいことのようです。一ころは、いま同じものを食べてみるとおどろくほかはないような食物をも、それほど苦にしないで食べていました。それでも、私などはまだしも他とちがった感覚をもちつづけていた方かもしれません。戦時中、ある文化人として名のある友人が、路傍の小さな祠にむかって敬礼しているのを見て、おどろいたことがあります。

それと同時に、人間は直接自分の身に迫らない条件に対しては、はなはだしく無感覚です。将来の社会的危険のときは、それについていかに道徳的警告をうけても無駄です。また、過去の実感をもただちに忘れます。われわれは目が醒めたとたんにそれまで見つづけていた悪夢を忘れる

ように、過去を忘れます。多くの人にとって、戦争の日々のことなどは、もうすでに古くさい無意味なことになりつつあるようです。あのような大現象をいまだにおのれの精神の事実として考えていたりすれば、それは迂愚として嘲られかねないのです。「人間が歴史から学ぶことはただ一つ、――それは、人間は歴史からは何も学ばぬ、ということだ」という言葉は真実です。

別の種類の知覚についていえば、たとえば時限爆弾というものがありました。これについての警戒の方法をおしえられたとき、ふかい印象をうけました。爆発するかもしれないが、しないかもしれない。するとしても、今か、一時間後か、一昼夜後か、まったく知りようがない。しかもこれは人間の神経をおびやかすためにあるのです。すなわち、運命の偶然のおそろしさを完全に象徴したものです。これは古代には神の力に帰せられていて、人間はその前にただ慴伏したものです。人工がついにこれほどまでにも神工に迫ったということは、実におどろくべきことではありませんか。

むかしは、こういう測るべからざる力に対する知覚を人間にあたえようとて、詩人が竪琴を弾じて歌いました。メーリケはあの優婉な詩「そを思え、おお魂よ！」を書いて警告しました。――人間よ、どこかの森に樅の木が生えている。また、どこかの園に薔薇が咲いている。それらはいつかおまえの墓に植えらるべきものだ。おまえの墓の用意はもうできている。そを思え、おお魂よ！　みよ、かしこにたわむれている二匹の駒とて、いつおまえの屍を輓いてゆくのかもしれぬ。しかも、あのきらめく蹄の鉄の落ちぬさきに――、というのです。メーリケの小説の中では、モツアルトがすでに死期が迫っているのを予感しながらこの詩に作曲することになっています。夭折した天才はさだかならぬ自分の運命を負いながら、華麗な創造にいのちを燃しつづけるのです。

まことに、モツアルトがあの若さで、しかもあのような明るく豊かな音楽をつくりながら、つねに死を思っていたということは謎のようなことです。彼が父にあてた有名な手紙は、三十一歳のときに書かれたものです。

……死は（この言葉どおりの意味で――）、われらのいのちの最後の目的ですから、私は数年来この人間の至上の友とすっかり知りあいになり、私にとってはその姿はもうすこしも恐ろしいものではなくなりました。むしろ、落ちつけ慰めるものとなりました。さいわいにも死をばわれらの真の幸福への鍵として知る機会をあたえられて、私は神に感謝します。私はまだ若いのですが、寝床につくごとに、おそらくは翌朝はもう生きてはいないかもし

れない、と思わないことはありません……。

モツアルトの手紙はみな快活で、たのしげで、こまごまとした日常の話が盛られていますが、この手紙にも嘻々とした天真の情があふれています。暗い調子はすこしもありません。しかもあのエーテルのかがやきのような天才の裏にひろがっている無際限の虚空が、ここに覗いているのです。

モツアルトはこの手紙を書いてから四年後に、キーンの共同墓地に葬られました。

メーリケはこの天才の晩年のある一日をとりあつかって、彼がいまだあらわれない運命を負いつつ、創造し、社交し、たわむれ、愉快な小さなしくじりをする姿を描いています。そうして、「そを思え、おお魂よ!」という素朴なボヘミアの民謡の形に託した歌で結んでいます。

このようなどこかに伏せられていていつ襲ってくるか分らぬ者に対して、むかしの人は哲学や説教や詩によって警告されていたのでした。われわれがこういうものに対する知覚をあたえられたのは、もっとあらあらしい露骨な形でした。

三

このようにして、私は十年間の体験から、その間のあけくれにいまだ触れたことのないものに触れて、ある異様なものについての表象をえたのです。それは、運命ということです。

もともと私は運命などということについては、何の観念ももってはいませんでした。ただ漠然と、そんなものはあるものではない。これは人間が説明の都合のためにつくりだした言葉にすぎない、これによって実は何も示されはしない——、こんな風に思っていました。ちょうど古い壁の上に浮き出したしみの無意味な形を、子供がこれは巨人だ、これは帆船だ、といって判じているようなものだと思っていました。

ところが、今の私には、この運命ということが精神の枠になってしまったのです。われらの意志を離れて存在する力がある、それがあるいはわれらを強制し、あるいは偶然となってあらわれる。われらはこれに対して一指を染めることもできない。——この記憶がもはや拭うことができないものとなりました。そして、これはまたわれらの行手にも浮び上って見えている。まずこの事実といかに対決するか——、これが人間の威厳の恢復の前提問題と思われるようになりました。

もともと歴史の出発点にあっては、人間はたえざる自然力の脅威の下におそれおののいていました。この外の力が

生存に干渉してきたとき、人はそれを運命とよび、その背後にこれをあやつる何者かを想定しました。古代の悲劇作者はこれに支配される人間のさまを描きました。コロノスの老人たちの合唱団は次のようにうたいました。

神々の定めしことに
ならざるところなし。
そを時がみそなわす。時がそをみそなわす。
ある人はほろび、ある人は興れり、
いまだ日の傾かぬあいだに。

古代人は子供が古い壁のしみを判ずるように、焼かれた亀の甲の裂目や獣の腸の具合などによって、この測りがたい何者かを占いました。そうして、もし何らかの運命におそわれたときは、かくなるのは何事かの応報であろうと、それを贖うべき人間の罪をさがして、ここに一応の解決をえてみずから慰めていました。

しかるに、人間はやがてかかる下僕の地位から、一たびは主人の地位になり上ることとなりました。

十六世紀にフッテンは「精神はめざめた。生きることはよろこびである！」と叫んだそうです。このころから、人間は礙ぐるものなき自己の力を自覚し、一切の外力は征服さるべきものだという確信を抱くにいたったのでしょう。前とはあべこべに、おのれが外力を強制しうる、おのれの知力と意志の前には一切の偶然というものすらいつかは排除しうる、と思ったのでしょう。しだいに運命に対する知覚は人間からなくなってしまいました。これは単なる痴人の妄語となってしまいました。

古代人は運命を三つに分け、モイラは決定、チュケは偶然、ダイモンは性格としましたが、近代人はせいぜいこの最後のものを認めただけでした。そうして、心たかぶるあまり、この世界のおそろしさを知ったと唱える人すら「運命の愛」などといって、運命をも自分の存在の中に抱きこみとりいれると揚言し、人間はそのような超人にまでなるべきだ、と教えました。

この人間拡大のいきおいはいつまでも続く、と思われました。それは進歩と名づられ、たしかに続きました。しかし、続いているうちに、この進歩は異様な変貌をはじめました。そうしてついには、元来が人間によってつくられたものでありながら、それ独自の法則と力学をもつようになり、かえって外からの力として人間に臨むものとなりました。そうしてついに、われらの時代には、これが古代の自然力と同じ作用をするものに還りました。

前にいった時限爆弾などは、そのごく部分的な一例です。

過去十年の間、われわれは歴史の初めの頃の人間と同じように、外力の支配の下に飜弄されていました。それはときには水も洩らさぬほどに激しく、ときには気まぐれきわまるものでした。人間はその前にはまったく無力でした。われわれには運命というものが、ふたたび具体的な形をとって目の前にあらわれてきました。これに接して、ある人人はそこにやはり何人かに帰せらるべき罪を探して、かまびすしく人を責めています。これはおそらく人性の自然なのでしょう。またある人々はこうしたものと知ってか知らずにか、あえてこれにむかって挑戦して、それをなおおのれの力によって造りかえようと努力しています。

壁の上の姿は一度そうと知覚してみると、もう他の形で見なおすことはできません。私はこれを運命と解読してから、なおその一つ一つの線やしみをたどってみました。

四

まずそこに最初にありありと浮び上って見えたのは、政治というものでした。

むかしエヂプス王はいかに努力しても、定められた彼の運命から逃れることはできませんでした。いまわれらをいかにしても捉えて離さないのは、政治です。近代の組織と武器をもった支配者は神のごとき力をもっています。*被支配者はいかにしても支配者に対抗することができない。いかに剛毅な人といえどもただ忍苦する他はない。これがわれらのおかれた現実でした。

すでに百数十年も前に、ナポレオンは「いま運命劇なんか作って何になる。近代にあっては、政治が運命だ」といいました。過去何年かの間に、私はいくたびこの言葉を思いおこしたかしれません。

軍の強制力は絶対でした。組織と武器をもったその定めたことにならざるところはありませんでした。かれらはいいました。「吾人はこれこれの事を欲する。これをまげることはできない。もしこの要求を容れなければ、しかじかのおそるべき結果を生むであろう。この結果を生むことについては、一に吾人の要求を容れない者に責任がある」軍はこういう方式をもって内外に迫り、その意志を貫きました。ただし、この方式はただに軍が採用しただけではなく、現代のすべての政治的な力の運用の方式らしく思われます。

これに対して反抗することは、ある人のある時の表現をかりていえば、まことに「鉄筋コンクリートを竹箸でかきまわそうとする」ようなものでした。

この表現は軍のスポークスマンが使った言葉です。宇垣氏の組閣を全国民が支持したにもかかわらず、軍がこれに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com